



Title	赤木先生の思い出
Author(s)	支倉, 崇晴
Citation	Gallia. 2016, 55, p. 173-176
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61933
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

赤木先生の思い出

支倉 崇晴

只今懇篤なご紹介に与った支倉崇晴です。

こうして、赤木昭三先生追悼の研究会である第76回大阪大学フランス語フランス文学会でお話できることを大変うれしく、また光栄に思っております。

山上浩嗣さんが大阪大学大学院文学研究科紀要第52巻—2で刊行されたその博士論文フランス語版のあとがきに記しておられるように、「本学（つまり大阪大学のことですが）フランス文学研究室は、フランスでも名高いパスカル研究の重要拠点」です。赤木先生もその一翼を担われていたわけですが、わたくし自身この重要拠点に連なっておられた歴代の先生方に永らく大変お世話になってきました。

初代の和田誠三郎先生のお名前はそれ以前から存じ上げていましたが、初めてお目にかかったのは、1963年秋のフランス政府給費留学生（いわゆるブルシエ）試験の面接のときでした。その後、修士論文執筆に際して、当時日本では大阪大学仏文にしかなかった文献の複写を取り寄せるときにも和田先生にお世話になりましたし、さらにその後、すでに大阪大学を退官しておられた先生は、わたくしの身の振り方までご心配くださいました。

次の原亨吉先生については GALLIA 誌 LII 号に寄稿しましたのでここでは省略します。

そして赤木先生ですが、パスカルの自然観の探求から研究を始められた先生の研究業績の内容については、語るにふさわしい方がわたくし以外にこの場におられると思いますのでここではふれません。学究肌で研究一筋の生涯を送られた先生がわたくしに対してお見せになった時折のお姿を時間を追って思い出すことで、先生のご生涯のエピソードの一端に触れることにいたします。

先生のお名前をわたくしが初めて知ったのは、わたくしが学部生だった1959年に刊行された人文書院版『パスカル全集』を通じてでした。この全集と先生との関わりについては本日配布された GALLIA 誌最新号に「赤木先生と邦訳『パスカル全集』」と題して一筆させていただきましたのでそちらをご覧くださいと思います。

ところで、日本人の留学生が17世紀フランス文学に関してフランスで博士号をとるケースもうれしいことに次第に増えてきていますが、先生は第二次大戦後の第一号として1962年に先陣を切ってソルボンヌで学位をおとりになりました。留学中の先生は、大阪大学やご自身のため数多くの本を買いこまれ、パリ国際大都市日本館 Maison du Japon のお部屋に山積みされていたことが目撃者を通じて日本にも伝えられ、わたくしなども憧憬の念を抱いたものです。

先生が留学から帰国された1962年3月の2年半後の1964年秋にわたくしは留学しましたが、留学中の研究指導は主としてÉcole pratique des hautes étudesにおられたジャン・オルシバル教授にさせていただきました。日本と縁の深いジャン・メナール教授は当時ボルドー大学におられ、この留学中にお目にかかる機会はありませんでした。ジャンセニスム研究に大きな足跡を残されたオルシバル先生のセミナーでは、先生が入手されたばかりの文献をその日の本題に入る前にまず紹介されていました。赤木先生とオルシバル先生との関係については、確認しないままになってしまいましたが、日本フランス語フランス文学会の1964年3月刊行の学会誌第4号掲載の論文を赤木先生がオルシバル先生に贈られたので、あるときセミナーで紹介されました。その席にいたただ一人の日本人として誇らしい気持ちになったことを今でも憶えています。当時はまだ日本人の業績がフランス本国で知られることはほとんどありませんでした。

その赤木先生にやっとお目にかかることができたのは、先生が大阪大学で教養部から文学部に移られたばかりの1971年の秋でした。パスカル研究の泰斗の、先にも触れたジャン・メナール教授は、この年4度目の来日をされ、初めて奥様も同道され、夏から初冬まで数か月日本で過ごされました。日本フランス語フランス文学会の秋の全国大会は、この1971年には、10月の9日と10日に愛知県立大学で行われ、この機会にメナール夫妻は名古屋地区を訪問されました。ホテルから愛知県立大学へ夫妻をお連れしたわたくしは、大会会場の入り口のところで原亨吉先生とともに待ち構えておられた赤木先生に初めてお目にかかることができました。

この半月後の1971年10月27日、メナール先生はここ大阪大学仏文で講演をされました。半年前に横浜国立大学に着任したばかりであった新米教師のわたくしは、早稲田大学の安井源治先生と共にこの講演を拝聴するために関東から駆けつけました。その夜、大阪北浜の花外楼で行われた大阪大学関係者によるメナール夫妻を囲む宴席に、赤木先生がわたくしにまで声をかけてくださったので、わたくしは最年少ながら陪席する光栄に浴しました。宴に連なったのは、主賓のメナール夫妻とホスト役の原亨吉先生、赤木先生に加えて、名誉教授の和田誠三郎先生を初めとして、同じく名誉教授で元大阪大学理学部長の中村幸四郎先生、大阪大学の現役だった岸本通夫、池長澄の両先生、当時は大阪外国語大学の田辺保先生、今日もご出席くださっている関西学院大学の森川甫先生、それにともに鎌倉の住民であった安井源治先生とわたくしでした。

翌日の1971年10月28日、大阪大学仏文の学生さんたちは、赤木先生に引率されてメナール夫妻と共に奈良に遊ぶことになっていて、赤木先生はそれにもわたくしを誘ってくださったので、喜んで参加させていただきました。この日、赤木先生の横にいるわたくしを見てある学生さんが赤木先生に向かって「赤木先生の横におられるのは先生の息子さんですか」と言われたのを今でもありありと憶えています。そして、この発言をされたのは、今日この席におられる柏木隆雄先生ではなかったのかと今でも思っています。偉大な親を持って苦労した人たちを何

人も見たり聞いたりしていたわたくしは、このとき、赤木先生のような親を持つと子供は大変だろうなあと内心思い、20年後の赤木先生の最終講義のあとのパーティの席上そのことを披露しました。他方、今日司会をしてくださっている永瀬春男先生と初めてお話できたのも、この日奈良においてでした。いろいろとわたくしにとって思い出深い大阪、奈良での二日間でした。

1988年9月に東京で、パスカル研究会の総力を結集して催した国際シンポジウム〈Pascal, Port-Royal, Orient, Occident〉にも、赤木先生はもちろん参加して下さり、新しい知見を盛り込んだ《Comment interpréter les *Expériences nouvelles touchant le vide* — de l'horreur limitée du vide à la colonne d'air》という発表をして下さいました。

日本で行われたフランス語だけを使用言語とする最初のシンポジウムと思われるこの国際研究集会の2年半後の1991年、赤木先生は大阪大学を定年退職されましたが、その最終講義をわたくしも拝聴し、記念パーティにも前述のように出席しました。

この頃、『メナール版パスカル全集』という新しい邦訳全集刊行の準備がされていて、先生は編集に携わった4人の中の最年長者として、この全集刊行の文字通り牽引車となって下さいました。この全集への先生の具体的貢献についても、GALLIA誌最新号に載せた「赤木先生と邦訳『パスカル全集』」に記しましたので、ここでは繰り返しません。先生とわたくしとは、関西と関東というように住んでいるところも離れていましたので、学会やシンポジウムの折を除くとなかなかお目にかかる機会がありませんでしたが、この全集の編集のために神戸や京都で行われた編集会議等でお目にかかる機会ができたことはありがたく、いろいろ学ばせていただきました。

20年前の1995年1月17日に阪神・淡路大震災が起これると、原亨吉先生、赤木先生、森川甫先生といった方々の安否を気遣う電話その他が、メナール先生を初めとしてフランスから直接的、間接的にわたくしのところにも殺到しました。永瀬春男先生を通じて、赤木先生のお宅は被害にあわれたが、先生ご夫妻は無事で、京都の都ホテルに避難しておられることを知り、さっそくホテルの赤木先生にお電話しました。そしてフランスにも先生のご無事を伝えることができました。

この震災の年の12月末、わたくしは大阪大学仏文で集中講義をする機会が与えられました。講義が終わった金曜日の12月22日の夜、柏木隆雄先生が立派な本のつまったお宅に招いて下さり、都ホテルでの長期滞在を終えて神戸のお宅にすでに戻られていた名誉教授の赤木先生もわざわざ柏木家へ足を運ばれました。談論風発、実に楽しい夜でした。

さて、この思い出話の中でもすでにお名前が出てきた現在94歳のジャン・メナール教授は、数々の要職を歴任された後、1997年にフランス学士院 Institut de France を構成する5つのアカデミーの一つの Académie des sciences morales et politiques の会員に選ばれました。

アカデミシャンに選ばれると、正装の際腰に差す剣を友人、知人、教え子たち

が醸金して贈る習慣があります。メナール教授のための醸金に際しては、呼びかけ人会、発起人会に相当する61人からなる *comité d'honneur* が結成され、その中に8人の日本人が入りました。当時の阿部良雄日本フランス語フランス文学会会長、中村雄二郎日仏哲学会会長、前田陽一先生のお嬢様の入江光子さんとそのご主人の入江昭ハーヴァード大学教授といった方々、そして日本におけるパスカル研究の重要拠点である大阪大学仏文からも原亨吉、赤木昭三両名誉教授が入られたのです。

メナール先生の依頼を受けて日本での醸金はわたくしがまとめましたが、世界中で1000人近い醸金者があつたうち130人が日本人でした。フランス文学の世界での日仏間交流は年々深まる一方で、うれしく、ありがたいことだと思いますが、一声呼びかけるとたちどころに130人もの日本人が醸金に応じるようなフランス人学者は今後なかなか現れない気がします。メナール先生は1960年代にピレネー山脈に近い Pau や志賀高原のスタージュで数多くの日本人を教えられましたし、その後もパスカルや17世紀研究者を中心として今日に至るまで日本人と長く交流を続けておられるからこそと思われまます。

赤木先生が *comité d'honneur* の一員になられたこともあってか、先生ご夫妻は率先して多額の醸金をしてくださいました。

Remise de l'épée、つまり剣の授与の式典は、1998年3月16日、Puvis de Chavannes の大壁画やパスカルの像があるソルボンヌの大講堂 *Grand Amphithéâtre* で、ソーニエ・セイテ大学担当大臣、ソルボンヌ学長、マルク・フェマロリアカデミー・フランセーズ会員その他のお歴々を前にして行われましたが、日本人の出席者の数の多さが目立ちました。赤木先生ご夫妻をはじめとして10人ほどはこの日のために日本からわざわざ駆けつけて来たのです。

たしかこのパリ滞在中だったと思いますが、赤木先生ご夫妻とわたくしども夫婦は4人で会食する機会がありました。ちょうどサマータイムに移行する時期であったことに気づかず、レストランで落ち合う時間に一時間のずれが生じたことも含めて、今となってはなつかしい、思い出に残る食事となりました。先生ご夫妻は、パリでバッハのマタイ受難曲を聴きに行かれたことなどを話してくださいました。それが記憶に残っています。

先生は晩年、わたくしどもが住んでいるところからそう遠くない横浜市青葉区に主としていらっしゃったようでした。いつでしたか、JR横浜線にご夫妻並んで座っておられるのを目にしたことがあります。これが先生のお姿を拝見した最後の機会になりました。このとき、言葉をおかけする余裕がなかったことを悔やんでおります。

ご清聴ありがとうございました。

(東京大学名誉教授)